

# 身近なまちの風景物語(18)

## 丸い創意

まちを歩いて、何かおもしろいことがないかとキョロキョロする。右、左と視線を動かし、さらに上と下も。あたかも目の体操のように。

時々振り返る。反対側から見る風景に何か違いがあるかもしれない、見逃したものがあるかもしれない、と。あたかも首の体操のように。

おそらく下はあまり意識されない。しかし視線を下に向けてみると、目に入る風景から思いを巡らすきっかけが見つかる。

たとえば歩道がレンガ敷きだったり、タイル張りだったり、石畳だったり。その規則的な並べ方に何か意図があるかもしれないと思案する。

下水道のマンホールの蓋はわかりやすい。地域の名所、名産や特産品など、地域固有の対象をもとにデザインされた「路上の芸術」である。何をモチーフとしたデザインか。立ち止まって、それを読み取る。

自治体ごとに独自のデザインを採用している。鋳物の型を取り、凹凸したデザインに趣向を凝らしている。駅周辺では着色もされている。

蓋は丸い。そこに自治体名が施される。円形では

あるが、自ずと画面に上下が生まれる。その上で円形を利用した図案が考えられている。

那珂市では市の花である「ひまわり」がデザインされ、つくば市では筑波山、スペースシャトル、地球が施されている。

下水道はとかく地味なインフラであるが、各地の事業者は独自のマンホール蓋のデザインをもとに、「マンホールカード」を制作している。このカードにはデザインの説明や由来などが記されている。

徐々にその数は増え、全国で500以上の自治体、600種以上のカードが生まれている。

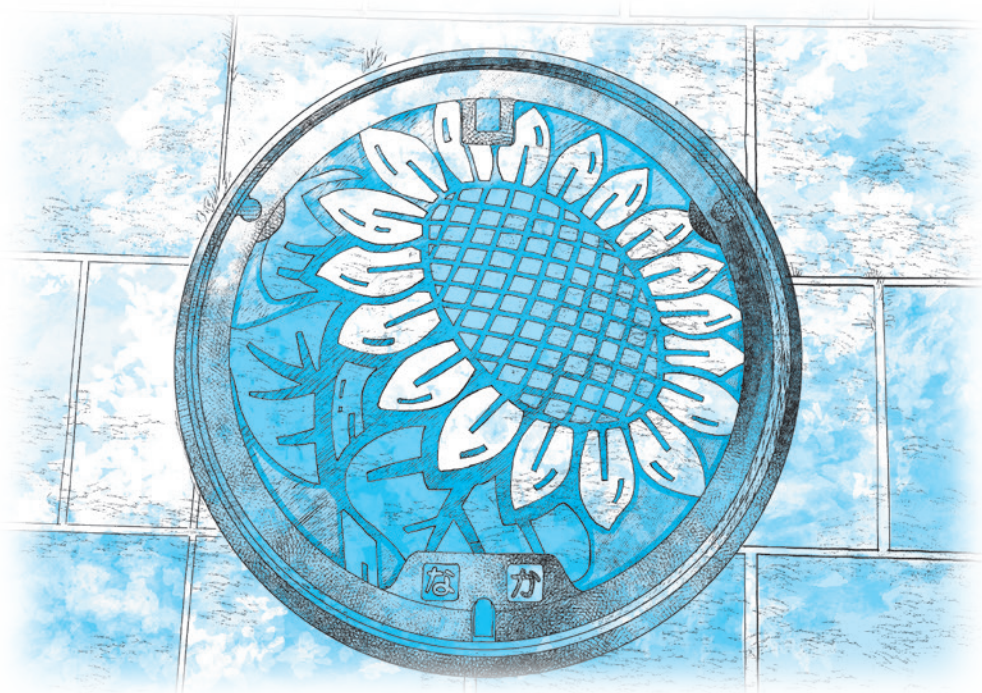
カードのコレクターを開拓しつつ、下水道を身近に感じてもらう施策である。茨城県内でも結城市や鹿嶋市など17以上の自治体でカードが発行されている。

マンホールの蓋は地面にあり、じっと動かず、わたしたちの視線を待っている。堪え忍ぶ存在である。

視線を下に向けてそれを見つけると、デザインからメッセージを発見することができる。頭の体操になる。

野中 勝利

筑波大学芸術系教授・芸術専門学群長



挿絵：久田琳佳子（筑波大学芸術専門学群4年）